

国際標準論理文章能力検定 レベル10 2019年度 第2回 解答と解説

問題Ⅰ 論理的言語力

測 定 す る 能 力

論理的言語力	論理的読解力A	論理的読解力B	論理的思考力	論理的表現力
日本語を論理的に扱う能力。一文の構造を論理的につかまえる力。 ことばのつながり、指示語・接続詞などを論理的に扱う力。	文章を論理的に読む力。小説などを客観的に読む力。	文章構造を論理的に解説する力。文と文との論理的関係、段落との論理的関係、文章全体の論理構造を把握する力。	文章の要点を論理的に整理し、まとめる力。論理的に話す力。論理的に話す力。論理的に説明する力。思考し、自分の考えをおもに記述力・論述力。	他者に向かって、論理的に話す力。論理的に話す力。論理的に書く力。

* * *

(40点)

問題Ⅱ 論理的読解力A

* * *

(40点)

(1) 行数	(2) 行数	(3) 行数	(4) 行数
14 行目	19 行目	7 行目	24 行目
誤	誤	誤	正
あれ以上に	それ以上に	つまり	正
日本語によつてその感性を磨く	「やばい」という言葉を	「やばい」という言葉で	日本語によつて、その感性を磨く
たとえば	日本語によつてその感性を、磨く	日本語によつてその感性を、磨く	日本語によつて、その感性を磨く

第一問 ● 解答

第一問 彼女はなぜ

(1) ウ (2) オ (3) ア
(4) イ (5) エ

- 第二問 第二段落…A Iが普及して
第三段落…実は言語と感性
第四段落…また、頭の中で

第五問 そんな事が
第四問 そなな事が
第三問 D 工 E ウ C イ
第二問 第二段落…A Iが普及して
第一問 第一問 各5点

俊吉を妹に譲るため、信子が他の人と心に
もない結婚をしたこと。

「具体的に」という条件に注意。信子に
宛てた、照子の手紙の中に「私の事さえ御
かまいにならなければ、きっと御自分が俊
吉さんの所へいらしたのに違ひございませ
ん。」とあります。この一文から、自分の
ために信子が心にもない結婚をしたのに違
いないと、照子が想像していたことがわ
ります。

D 直前の「御姉様の犠牲」と、直後の
「そう」が、ウの「御姉様も俊さんが御
好き」を指していることから判断。

E 直前の「死んででも、御詫びをしよう
かと思いました」の理由が入る。

問題Ⅲ 論理的思考力

* * *

問題Ⅳ 論理的思考力

* * *

(40点)

- 第一問 第一問 各5点
第二問 第二問 各2点
第三問 第三問 各2点
第四問 第四問 各5点
第五問 第五問 10点

第二問 欠落文の「それらの解釈」が、「(C)又或ものは彼女を疑つて、心がわり
がした」を指します。さらに、欠落文の冒
頭の逆接「が」も根拠。

第一問 (1) 直前の「こう云う」が「皮肉や警句」
を指していることから、ウ「冷笑」。
(2) 直前の「置きざりにされる」から、オ
「閑却(いい加減に放つておくこと)」。
(3) 俊吉が照子を忘れがちなことを気にし
ないのだから、ア「無頓着」。
(4) 「松林」を形容する言葉。直後に「沈
黙」「そう云う寂しい」とあることから
わかる。

第二問 (1) あなたは察する文化の中で育っている。
(2) 事をなすには、自分の心理状態を冷静
に観察せよ。
(3) 事なすには、冷静に自分の心理状態
を観察せよ。

- ◆ 解説 第一問
(1) 直前の内容を指しているので、「あれ
以上に」は不適切。
(2) 目的語を表す「を」ではなく、手段を
表す「で」が適切。
(3) 「数学者は」は例示。
(4) 「日本語によつて」は、直後の「その
感性を」ではなく、「磨くことができる」
にかかる言葉です。
- 第二問 第一段落は、人間は右脳と左脳を同時に
使っているということ。第二段落は、A I
が普及している時代には、言語によるイ
メージ喚起が重要になること。第三段落は、
感性と言語が密接な関係を持つてていること。
第四段落は、言語の論理的な使い方が大切
だということ。

第三問 A 直前の内容とのつながりから、信子と
俊吉との関係を述べたものが入る。オの
「いよいよ親しみが増した」は、(一
ない訳には行かなかつた)を受けて、ア
の「だから」が順接でつながっている。

B 空所直前の「軽蔑出来ないものを感じ
た」を受けている。

C 空所直後の「又或ものは」は、イの
「だから」が順接でつながっている。

- 第一問 第一段落は、A Iが普及して
第三段落は、A Iが普及している時代には、言語によるイ
メージ喚起が重要になること。第三段落は、
感性と言語が密接な関係を持つていていること。
第四段落は、言語の論理的な使い方が大切
だということ。
- 第二問 第一段落は、A Iが普及して
第三段落は、A Iが普及している時代には、言語によるイ
メージ喚起が重要になること。第三段落は、
感性と言語が密接な関係を持つていていること。
第四段落は、言語の論理的な使い方が大切
だということ。

A 直前の内容とのつながりから、信子と
俊吉との関係を述べたものが入る。オの
「いよいよ親しみが増した」は、(一
ない訳には行かなかつた)を受けて、ア
の「だから」が順接でつながっている。

B 空所直前の「軽蔑出来ないものを感じ
た」を受けている。

C 空所直後の「又或ものは」は、イの
「だから」が順接でつながっている。

- 第一問 第一段落は、A Iが普及して
第三段落は、A Iが普及している時代には、言語によるイ
メージ喚起が重要になること。第三段落は、
感性と言語が密接な関係を持つていていること。
第四段落は、言語の論理的な使い方が大切
だということ。
- 第二問 第一段落は、A Iが普及して
第三段落は、A Iが普及している時代には、言語によるイ
メージ喚起が重要になること。第三段落は、
感性と言語が密接な関係を持つていていること。
第四段落は、言語の論理的な使い方が大切
だということ。

◆解説

第一問

- (1) まず「育つて」+「いる」と述語を決定。それに対する主語は「日本人は」。「察する」→「文化の」→「中で」→「育つて」いる」とつながる。
- (2) 述語は「観察せよ」で、命令文。次に「なすには」と読点に着目。「事を」→「なすには」とつながる。「自分の」→「心理状態」→「観察せよ」、「冷静に」→「観察せよ」とつながる。

- 「なすには」と読点に着目。「事を」→「なすには」とつながる。「自分の」→「心理状態」→「観察せよ」、「冷静に」→「観察せよ」とつながる。

第二問

- (1) 述語が「しなさい」で、主語は「あなたは」、目的語は「生き方を」。「筋を」→「通した」→「生き方を」→「しなさい」とつながる。不要な言葉は「決して」→「正しい」。
- (2) 助詞・助動詞を自立語につけて、文節を作る。「決めるものではない」を見つければ、後は「人間の」→「価値は」→「決めるものではない」「他人が」→「決めるものではない」とつながる。不要な言葉は「に」「ある」。

- 第三問 文字を組み合わせて単語を作り、次に文節、一文の順に作成する。漢字はそれ自身が意味を持つので、最初は漢字の組み合わせを考える。

- (1) 述語は「堪」「能」「す」「る」で、主語は省略。目的語は「星」「空」「を」。
- (2) まず「曖昧模糊」という四字熟語を作れる。「頭」「は」→「状」「態」「だ」が主語と述語。

- 第四問 希望を象徴したものが、答え。「梅雨空の闇夜」で、「雲間から漏れてくる」のは、「月光」。
- 第五問 「自分一身のことばかり話題にする人」を批判しているのだから、「私事」が答え。

- 第六問 文字を組み合わせて単語を作り、次に文節、一文の順に作成する。漢字はそれ自身が意味を持つので、最初は漢字の組み合わせを考える。
- (1) 述語は「堪」「能」「す」「る」で、主語は省略。目的語は「星」「空」「を」。
- (2) まず「曖昧模糊」という四字熟語を作れる。「頭」「は」→「状」「態」「だ」が主語と述語。

- 第七問 「自分一身のことばかり話題にする人」を批判しているのだから、「私事」が答え。
- 第八問 「さもなくば政略の具であつた。」を批判しているのだから、「私事」が答え。

- 第九問 「いかに昏迷」

- (d) (a) (4) (1) オ
(e) (b) (5) (2) ア
(f) (c) (3) イ
ウ

◆問題IV

論理的読解力B

(40点)

●解答

第一問 大乗の非心

- 第一問 さもなくば政略の具であつた。↓

いかに昏迷

- 第五問 (d) (a) (4) (1) オ
(e) (b) (5) (2) ア
(f) (c) (3) イ
ウ

◆問題V

論理的表現力

(40点)

●解答例

- 第一問 若者の投票率が低い原因の一つは、学校教育にある。そもそも日本では、社会の一員としてどのように社会を作っていくかを主体的に考えさせる教育が少ない。また、

- 主権者教育が始まつたものの、教師は政治的中立を求められ、特定の政党や政治家を挙げるのはタブーとされているため、必然的に授業の内容は具体性を欠くものとなり、政治や選挙に興味・関心を持つ生徒は少なくなる。二つ目の原因として、報道の在り方が挙げられる。政治に関しては、本質的な議論よりも、スキヤンダルや揚げ足を取り

◆解説

第一問

- まず第二条の説明箇所を探すと、(12)段落だと分かるので、この前後を含めて検討する。欠落文冒頭に「さればこそ」とあるので、「第二条において信仰の問題を示された」理由となる箇所を探すと、(11)段落の末尾だとわかる。

第二問

- 当時の仏教は政略の具で「あつた」ので、「なかつた」が間違い。

第三問

- (14)段落の「いかに昏迷と騒乱があつたにせよ、そこには、一つの出来事、一つの問題に向つての、しづかな凝視と味いと沈思と――かかる悠久の時間というものはあつたに相違ない。」に着目。その後に「即ち」とあるが、「即ち」以下の文と「イコール」では結ばれないことから、余分な一文だとわかる。

第四問

- (1) 前の流れをひっくり返しているから、逆接の「しかし」。

- (2) 悲劇を追加しているので、添加の「しかも」。

- (3) 空所直前よりも、直後を選択するのだから、「むしろ」。

- (4) 「たといとも」。

- (5) 話題の転換の「ところで」。

第五問

- (a) 直前に「懐しい歴史の思い出」とあることから、才「思慕」。

- (b) 後半に仏法の伝来について述べられていることを読み取ること。飛鳥びとをとられたものは、ア「信仰」。

- (c) 「現世利益」は、四字熟語。

- (d) 「灰燼に帰す」は、すべてが消滅すること。

- (e) 直後に「かくあれかしと衷心より念じ給うた言葉」とあることから、「祈り」。

- (f) 「～的」につながり、「求道心」をかぎる言葉なので、「自發」。

◆解説

第一問

- 本問は、あくまで論理的表現力を試すものであり、与えられた条件をもとに筋の通った文を作成できるかがポイントです。若者の投票率が低い理由について、与えられたキーワードを使って論述します。まず「主権者教育」が始まつたにもかかわらず、十代の投票率が上がらないどころか、低下し続けている理由を考えます。教育現場で「政治的中立」が求められる中、具体的な政党や政策を示して意見交換したり、教師が意見を述べたりすることは難しく、表面的な主権者教育にとどまっている可能性があります。また、「報道の在り方」に関しては、なぜ若者が政治に関心を持てないのか、なぜ「政治不信」につながるのかを考え、まとめましょう。

■配点

40点